ヒメウラナミジャノメは北海道から種子島まで広く分布し、幼虫がシバムギ、カモジグサ、チガヤ、メヒシバ、エノコログサなどのイネ科植物で成育するきわめてありふれた普通種である。食草があたりにいくらでも生える雑草とされる植物なので近隣にいてもおかしくはないのに高砂市松波町周辺ではみたことがない。5-6 月にちょっと山地環境にでかければ必ずみることができ、林縁の草地や道路上をヒョイヒョイという感じで飛び交う。タンポポやノバラなどの花の蜜を求める光景も普通に見られ、蜜を吸っている最中とか、普通に葉っぱ上にとまっているときにも、数秒間隔ではねを閉じたり開いたりして眼状紋を間歇的に見せる独特の動作をみせるが、ヒメジャノメなどジャノメチョウ属に多くみられる、鳥などの外敵を一瞬驚かすためとも考えられるしぐさである。はねの表裏ともに眼状紋が多く、学名：*Ypthima argus* の *argus* はギリシャ神話にでてくる、ゼウス（Zeus）の妻ヘラ（Hera）に命じられてイオ（Io）を見張った百眼の巨人 Argus（アーガス）に由来する命名で、誰が見てもこの複数の目玉模様が印象に残るチョウだ。画像で示したように、♀の前翅眼状紋のまわりにはうっすらとグラディエーションがかかって、新鮮個体ではとても味わい深くきれいだ。

加古川にはヒメウラナミジャノメによく似た少し大型のウラナミジャノメという絶滅危惧Ⅱ類選定の珍しいチョウがいる。”ウラナミ”は文字通り羽の裏に波状模様があるからで、沖縄から八重山諸島にかけて近縁種がリュウキュウウラナミジャノメ、マサキウラナミジャノメ、ヤエヤマウラナミジャノメ（決して早口言葉ではない！）と 3 種が生息している。ヒメウラナミジャノメはウラナミジャノメよりやや小型なのでヒメ（姫）がつくが、アカタテハとヒメアカタテハの関係と同じ考え方である。

ウラナミジャノメは後翅裏の目玉模様の数が通常 3 個、ときには図のように 4 個になる場合もあるが、その数はヒメウラナミジャノメより少なく、紋の大きさや並び方にも明らかな違いがあるので種の判別は容易である。両者の発生の時期もわずかに異なり、ウラナミジャノメが発生する 6 月半ばにはヒメウラナミジャノメの多くが飛び古した汚損個体となる。

ヒメウラナミジャノメの後翅裏面眼状紋の数は通常の 5 個から 6, 7 個までとか、♀の後翅表の紋が通常 2 個なのに 5, 6 個になるものも見られるらしく、普通種だといって見過ごすことなく、変異個体を探してみるという楽しみ方もある。

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.